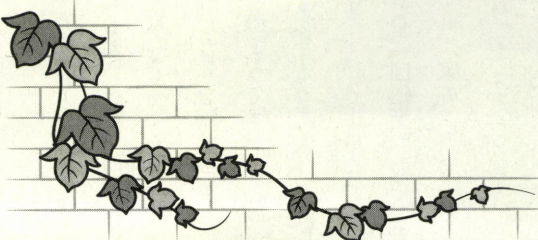


幼稚園の源流を求める旅  
森有礼の第二次在米時代(4)

## 森有礼の第一次在米時代



国吉 栄

### 森有礼の第一次在米時代

ボストンからニューヨークへは列車で向かった。早めの列車を予約しておいたので、昼過ぎにはニューヨークのペン・ステーションに着いた。車窓に続く美しい海岸線の眺めに目を奪われているうちに、大都会は突然のよう

に現れた。  
森有礼にはわが国初の外交官となる前に米国で暮らした経験があり、ニューヨークにはその時代に関係する資料がある。

森有礼は弘化四(一八四七)年七月十三日、薩摩藩士の五男として鹿児島城下に生まれた。薩英戦争後急速に開国へと方針転換した薩摩藩が、幕府の禁を破って自藩の若者を欧州へ派遣することを決めた時、その一人として選ばれた俊英である。当時数え年十九歳。開設されたばかりの藩の洋学校・開成所の英学専修生であった。

慶応元(一八六五)年、英国に渡った留学生たちは、最年少の少年が長崎商人グラバーの実家に預けられたほ

かは、全員がロンドン大学に入学し、海軍測量術や陸軍機械術などを学んだ。しかし一年後、藩の都合で半数が帰国し、森を含む六人が残った。だが、それからさらに一年後の慶応三年七月、彼らは一斉に学業を放棄して、米国に渡ってしまう。森はそれからおよそ九か月を米国で過ごした。これが彼の第一次在米時代である。

私のニューヨーク行き目的の一つは、コロンビア大学バトラー図書館であった。ここに、森の生涯に深くかわるHarris-Oliphant Papersと呼ばれる文書がある。

私が森有礼に幼稚園史との関係ばかりでなく一人の間人として関心を抱くようになったのは、『東北大学教育学部研究年報』に連続発表された林竹二氏の森有礼研究(1967, 1968)を読んだことがきっかけであった。それまで学問的テーマとしては取り上げられてこなかった森有礼の若き日の経験―それは、英国で勉学中にキリスト教の異端に誘われてアメリカに渡り、閉鎖的な村落の中で牛を飼い、パンを焼き、皿を洗って暮らした、という極めて特殊な経験であったが―を正面から取り上げ、それ

らを詳細に検討することを通して新たな森有礼像を描き出した、斬新で熱情あふれる論文であった。

森有礼研究者でもない私が、幼稚園関係の資料収集だけでなく、森研究の基礎資料を直接確認したいと考えるほど彼に興味を抱いたのは、彼が、幕末・明治初年の禁教下に、キリスト教と先のような特殊なかかわりをもっていたからである。林氏の論文には、すでにハリスの信奉者となっていた森が、勧誘のため、幕府の留学生取り締りとしてロンドンに滞在中の中村正直らの宿を訪ねたという資料も紹介されていた。中村は東京女子師範学校に幼稚園が付設されたときの校長である。私は保育史を学び始めたころから、キリスト教課者という特殊な経歴をもつ関信三が日本の幼稚園を解する鍵であると感じていたので、森と中村との間にもキリスト教を仲立ちとしての密かな出会いがあったことに、非常に驚かされたことを覚えている。

幼稚園における関信三の働きを明らかにするためには彼の個人的経験に向き合うことが必要だったように、外

交官としての森の働きを理解するためには、公的活動に入る前の彼の経験に向き合う必要があるのではないか。彼の経験は非常に特異なものであるが、ハリスやコロニーの奇怪さにとらわれて、彼がその生活を受け入れたことの意味を過大に、あるいは過小に評価したり、または評価すること自体をはじめから放棄してしまうのではなく、評価は先送りにして、彼の姿をできるだけ具体的ににとらえる必要があるのではないかと私は考えていた。

### Harris-Oliphant Papers

Harris-Oliphant Papersには、ハリス(Thomas Lake Harris)と、日本人たちをハリスに誘引した元駐日英国公使館書記官で、当時下院議員となっていた英国貴族オリファント(Laurence Oliphant)、及びハリスのコロニー(Brotherhood of the New Life)にかかわる雑多な資料が含まれている。中でも興味深いのはクーパー夫妻宛オリファント書簡であった。夫妻はオリファントの親しい友人貴族で、英国におけるハリスの信奉者である。彼らは一足先に母親

と共にコロニーで暮らしていたオリファントに代わって在欧の日本人たちを接待し、彼らの米国行きを助けた。夫妻への手紙には、日本人たちへの言及のみならず、きわめて閉鎖的で、しかし一面では実社会と強い世俗的なつながりをもつこの奇妙な集団についての、具体的な情報に含まれている。林氏がかつてこれらのコピーを持ち帰り、研究を深められた。

森研究が未完のまま林氏が亡くなられたため、それらの書簡は、当時刊行中であった『林竹二著作集2 森有礼 悲劇への序章』(1986)の末尾に、I. P. Hall氏の校訂によって収録された。ホール氏は一九七三年に *Mori Arinori* (Harvard Univ. Press) を出された著名な森研究者である。しかし氏は、読者の便宜を図るため、林氏を持ち帰られた書簡(それはコロンビア大学が所蔵するクーパー宛書簡のほぼすべてであったが)のうち、十通を割愛されたのである。私はそのことを大変残念に思っていた。いつかそれらを読んでみたいという思いがあった。バトラー図書館の一階で登録を済ませて、六階の Rare

Book and Manuscript Library) に行った。受付カウンター

の女性に手取り足取り教えていただいて資料の請求表を作成し、ようやくガラス張りの閲覧室のドアを開けた。

細長い閲覧室の正面に座っている司書に請求表を渡し、自分のパソコンをセットする。まもなく横手のドアが開いて男性が箱を三つ運んできた。司書は私に目で合図し、私は箱を取りに行く。一箱終わったら次の箱を渡します、と小声の指示。一箱受け取って自分の席につき、ふたを開け、一ホルダーずつ取り出して文書を確認し、コピーが必要な文書を備え付けの黄色い紙で挟んでいく。私を含め、三人が黙々と文書を読んでいた。

すでに読み慣れた文章も、異国の、この静けさの中で読むと、胸に迫るものがある。

「私はここで世捨て人のように暮らしている。箱で小屋やベッドを作り、食事は籠に入れて運ばれてくる。母とも話すことはできない。だから日本人たちとも話すことはできない。彼らは毎日厳しい労働をし、しかも喜びに

輝いている」(一八六七年九月<sup>不明</sup>\*)

「先週の日曜日、フェイスフル(ハリスのこと)が帰国以来初めて説教をした。四十人ほどが出席した。愛と歡喜が沸き起こり、みな涙を流し抱き合った。日本人たちは特にそうだった」(一八六七年九月二九日)

「日本に関する記事が載っている新聞を送ってくれ。日本人が喜ぶだろう。日本人は私たちの宝だ」(一八六八年四月十二日)

ハリスと日本人学生とは時代が出会わせたとすべきであろう。両者にとって決定的だったのは、学生たちが倒幕によって新たな国造りをめざしていた薩摩藩の留学生だったことであり、ハリスが既存のキリスト教の影響が最小限であった日本こそ、彼の理想を実現するに最も適した国と考えていたことであつた。ハリスが表現していた最大のテーマは再生であつた。彼は産業革命後の英国の悲惨な人民の状況を描き出し、責任を負うべき政治と教会の腐敗を厳しく批判して、信仰によって再生した人間によって新しい世界をつくり出さねばならないと説いていた。ハリスは学生たちに、信仰による日本再生

と、日本を発信地とする世界再生を説いたのである。

アメリカに渡った学生たちは、私心を捨ててどんな仕事でも喜んで取り組むことがハリス入門の初めであると教えられ、農作業に励んだ。彼らは英国においてそうしたように、米国でも密出国の日本人留学生たちに積極的に働きかけ、コロニーへと誘った。「ハリス翁の高説」を求め、入村する日本人は増えていった。

## アミーニアへ

ニューヨークでの調べものを終えた私は、アミーニア(Amenia)に向かった。慶応三年の夏、学生たちが英国から渡ってきた時に、ハリスのコロニーが営まれていた村である。

ニューヨークのグランド・セントラル・ステーションからメトロ・ノースのハーレムラインに乗った。列車は北に向かつてどんどん谷間に入っていく。百四十年前に、将来を囑望されていた待であった彼らは、繁栄の都ロンドンでの学業を捨てて、こんなに深い谷間の奥に

やってきたのだ。列車を乗り継ぎ、二時間と少して終点のWassaticに到着した時には、乗客はほんの数人しか残っていないかった。Wassaticはハリスのコロニーが最初に作られた所で、アミーニアはそこからさらに数マイル奥に入った村である。

そのあたりはオランダ人の入植地で、彼らが運営するバスが村内を走っていると聞いていた。だが、そこは山の中の無人駅で、バスなど走っている気配もなかった。困って、同じ列車で降りてホームのベンチに座っていた女性にアミーニアに行く方法はないかと聞いたところ、「夫が車で迎えに来るから送って行ってあげる。アミーニアのどこに行きたいのか」と言われた。アミーニアに行きたい理由と、そのどこかは私にもわからないのだと話すと、「ではアミーニアの図書館に連れて行ってあげる。そこから始めれば何かわかるかもしれない」と連れて行ってくださった。もう本当に心から感謝し、ご夫妻と図書館の前でお別れした。

村の小さな図書館で、私はまたしても助けられた。古

いものはこのあたりです、と案内された書架の前でただ古だけの本に当惑していると、本を返却に来た女性が気づいて話しかけてくださった。彼女は私の話にとても興味をもち、あちらこちらに電話をして情報を集め、古老の家を訪問し、古い地方紙のコピーをとり、コロニーがあつたであろう場所を探して車を走らせ、村の風景を見せてくださった。ドライブの後、私を美しいご自宅に連れて行き、遠くから来たのだからトイレを使いなさいといったわり、ご主人も一緒に村のレストランで食事までごちそうしてくださった。ワインも注文し、これはこの

村でできたワインだと教えられた。ハリスのコロニーでもワインを作っていた。森有礼もぶどう畑を耕していた。彼らのワインもこのような味だったのだろうか。彼らは



聖なる酒と言っていたが……。

最後に彼女は私を *Wassing* の駅まで送り、お礼を言う私に、私にとつても忘れられない一日になりました、ありがとう、とお礼まで言ってくれました。

夢のような一日だった。私一人では到底たどり着けず、帰つてもこれないような所に行くことができ、森有礼がいた場所について立つたのだ、という感激でいっぱいであつた。大勢の方々に助けられて実現できた旅であつたと実感している。

### 分裂と帰国

アミーニアで学生たちが労働に明け暮れていたころ、コロニーの移転計画が進んでいた。ニューヨーク州の西端、エリー湖畔の村ブロクトン (Brocton) に土地を買収したからである。このあたり一帯は米国有数のワインの生産地で、ハリスがここに移転したのも、昼夜の寒暖の差が激しくぶどう作りに適した土地で、大規模なぶどう園を経営し、ワインを作るためであつた。広大な敷地内

に鉄道の駅を作り、ホテルを建て、レストランも経営した。

二〇〇八年の旅で、私は念願のプロクトンを訪れた。

パツファローから車で南に一時間ほどの、ぶどう畑と刑務所が特徴の小さな村である。人目につかないところにあるトンネル状の巨大な石組みのワイン貯蔵庫と、いまは個人宅となっているVine Cliffと呼ばれる家と、大きな納屋が往時をしのばせる。木立の陰から、ふいに野良着姿の日本人が現れてきそうな、不思議な気がした。

移転は徐々に始まった。十二月下旬、総勢十三人の日本人がプロクトンにそろった日、ハリスは日本人たちのために茶会を開いた。それからまもなく將軍慶喜の大政奉還の報が届くと、コロニーは喜びに沸いた。日本人たちはもちろん、ハリスも涙を流して喜んだ。しかし、エリー湖も凍る厳しい冬を越え、村中が美しい緑におおわれるころ、学生たちは分裂した。

学生の一人畠山義成は、何につけ神命と称して命じるハリスに対して生じた疑念と、彼がそこを去るに至った顛末とを記している。ハリスは自分の著書を日本語に訳

せと命じた。それが神命であるなら、何よりその仕事を優先すべきではないか。自分たちもそうしたい。それなのに早朝から夜遅くまで農作業を命じられ、疲れきって翻訳する時間などないではないか。本当にハリスの命は神命であるのか、と。

分裂の直接の契機は、日米の間でもし戦いが起きたらどうすべきか、という学生間に起きた議論であった。祖国のために戦うべきか、中立を守るべきか。議論は沸騰して決着がつかず、ハリスに問うたところ、「我々は国籍によるのではなく神の義のために戦うべきである」、との答えであった。これを受けて、自分は祖国のために戦うという畠山が出て行った。畠山を追うように学生たちは去り、残ったのは森と鮫島尚信、ほか二人であった。落胆したハリスは、森と鮫島に、帰国して混乱の中にある日本の再生のために力を尽すよう勧めた。

帰国を決めた二人は米国に残る仲間の手紙を書いた。「いま自分たちが帰国するのに特別な目的があるわけではない。ただ祖国への責任を果たすためである。自分た

ちが無知であることも無力であることも、何ほどのこともできないこともよくわかつている。しかし我々は動乱と暗黒の中に身を投じることに決めた。そうすべきと感じたからである。自分たちが王国を回復するための最も小さな犠牲になるなら、それ以上の喜びはなく、本望である」と。二人はまだ元号が明治に変わる前の、動乱のただ中に帰国した。

死をも覚悟して帰国した彼らを待つていたのは、新政府による重用であった。三年にわたる英米での体験は新政府にとって得がたいものだったからである。

二人は外国官権判事という要職を与えられたのを皮切りに、次々に責任ある職務を兼務した。森は議事体裁取調、学校取調、軍務官判事、議事取調……。青年たちに課せられた職務の範囲の広さと重さに驚嘆させられる。

二人は連名で、「多くの人々が戊辰戦争の苦しみの中にあるいま、不肖の我らが重責を汚し過当な給与を得ていることは実に不安の至りであり、給与だけでも下げていただきたい。自分たちは三十円あれば十分である」と、

給与下げ願いを提出した。

翌明治二（一八六八）年三月に公儀所が開設されると、森は議長心得を命じられた。彼は次々に議案を提出するが、傲岸（ごうがん）とも見える姿勢は強い反感を招いた。加えて二人には制禁のキリスト教に通じているという疑念があった。そこへ森がいわゆる廃刀案を提出。議案は完璧に否決され、森は辞表を提出して故郷鹿兒島に帰った。

彼は廃仏毀釈で荒れ果てた寺の一角に英学塾を開いて若者たちを教えていたが、翌年の秋、突然の出府命令を受ける。米欧に初めて駐在外交官を置くことになり、森と鮫島に白羽の矢が立ったのである。森は駐米小弁務使、鮫島は駐英独仏兼任小弁務使に任命された（ただし英国は若造という理由で彼を認証せず、独仏二か国の兼任となる）。上京した森は鮫島と同居し、国家の根本にかかわる命題を見据えて、共に渡航の準備をした。

鮫島の渡欧に続いて、森も米国に向けて出発した。弱冠二十四歳の若き外交官の旅立ちであった。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）